新見公立大学紀要　第40巻
pp. 11－18, 2019

論稿

昭和20年代の奈良女子大学附属幼稚園の保育の実際

－試案「保育計画」、月案、『幼稚園の教育計画』を中心に－

高月　教惠[1)]*

1）新見公立大学健康科学部健康保育学科

（2019年11月20日受理）

昭和20年代の奈良女子大学附属幼稚園（以下、奈良女大附幼）の保育の実際は、「保育要領―幼児保育の手引きー」（文部省、昭和23年）を参考にして、幼児の生活に基づいて、戦前の教科的色彩の強い５項目を中心とした保育を見直し、附属校の特性と奈良の地域性を考慮して、正しい保育の方向性を求めて、昭和24年度試案保育計画（その基礎）（一）を作成し、その後月案を作成して、実践されていたと考えられる。さらに、昭和29（1954）年には、昭和24年度試案「保育計画」（その基礎）（一）と月案を反省検討して、幼児の生活経験を教育の視点から見直し、単元を中心にして秩序立て、組織化して『幼稚園の教育計画』として改訂されたと思われる。単元を中心にしたことについては、当時の主幹であった富永正がデューイの思想に傾倒していたこと、当時の奈良女子高等師範学校附属小学校（以下、奈良女高師附小）で実践されていた教育形態（しごと・けいこ・なかよし）に影響を受けて、幼小連携を見据えてのことと考えられる。

（キーワード）昭和20年代、奈良女子大学附属幼稚園、昭和24年度試案保育計画（その基礎）（一）、「月案」、『幼稚園の教育計画』（昭和29年2月）

１．はじめに

筆者は、『日本における保育実践史研究―大正デモクラシー期を中心にー』において、奈良女子高等師範学校附属幼稚園（以下、奈良女高師附幼）の大正元（1912）年度（開園）・昭和13（1938）年度・昭和18（1943）年度の保育日誌を中心に、戦前の保育の実際について考察した。その結果、次のことが明らかになった。

大正元（1912）年度の保育の実際（内容・方法）[1)]は、入園（開園）当初の11月は躾に重きをおきながら躾方と保育4課目（遊戯・唱歌・談話・手技）を中心に、12月以後は保育４課目を中心に各課目の個々の事項の充実に重点がおかれていたと思われる。そして、保母が中心となって画一的に指導されていた様子がうかがえる。特に、保育４課目の中でも手技に関する事項が多く、繋ギ方・画キ方・排ベ方・積ミ方・貼リ方・摺ミ方・豆細工といった手技の細分化された各活動が他の各課目（遊戯・唱歌・談話）と同じように重視されていたことがうかがえるとともに、フレーベルの恩物系列的な手技の活動の名残が感じられる。東京女子高等師範学校附属幼稚園では随意遊嬉[2)]を題目として取り上げられているのに対して、奈良女高師附幼では保育日誌に外遊びが行われていたことは記されているが、題目として取り上げられていないことから、保育の内容として位置付けられるほどには重要視されていなかったと考えられる。しかし、自由遊戯（遊）、自由積ミ方（手）、自由画キ方（手）等の事項から、保母が取り上げた活動の内容に自由が尊重されていた様子がうかがえる。

昭和13（1938）年度の保育の実際（内容・方法）[3)]は、保育６項目（談話・遊戯・手技・図画・唱歌・観察）を基盤として自由遊び・会集・行事等の保育要目と、諸注意及び反省・練習事項・国家的事項の訓練要目を柱立てに、保育が行われていた様子がうかがえる。そして、各項目を非常に丁寧に取り扱い、時には題材によって各項目を複合的に取り扱いながら、課程保育を重視して保育されていた様子がうかがえる。さらに、当時の主事であった森川正雄が紹介したプロジェクト法が、七夕祭という主題に基づいて実践されていた様子を垣間見ることができる。そして、自由遊びも尊重されながら、子どもをなすがままにさせておくのではなく、教師が計画的に取り扱いながら、子どもの主体性と自由性を尊重して指導しようとしている様子がうかがえる。また、保育要目においても訓練要目においても、君が代（唱歌）、支那事変絵本（談話）、戦争ごっこ（自由遊び）等の保育題材から、当時の戦時色がうかがえるが、日誌からは、子ども達がいきいきと園生活を過していた様子が伝わってくる。

昭和18（1943）年度の保育の実際（内容・方法）[4)]は、昭

*連絡先：高月教惠　新見公立大学健康科学部健康保育学科　718-8585　新見市西方1263-2

和13（1938）年度の保育６課目（遊戯・唱歌・談話・手技・観察・図画）が保育５項目（遊戯・音楽・談話・手技・観察）に改められ、保育５項目を基盤として、自由遊び、会集、行事、生活訓練に関するもの等が行われている。日々の保育では保母が中心となって画一的に指導していた様子がうかがえる。特に会集では、画一的・訓練的な様子がうかがえるが、自由遊びでは子どもの自発性や主体性が尊重されていた様子も見られる。昭和13（1938）年度と同様に、項目の複合的な取り扱いや、一題材の各項目の視点からの取り扱いや、植物の成長や行事にしたがっての一連の流れがうかがえるが、取り上げられた題材は昭和13（1938）年度に比べて少なくなっている。昭和13（1938）年度にはほぼ毎日2項目の課程保育をしていたことを考えると、会集の時間が長くなったためと考えられる。日誌からは、戦時下にあっても、保母は子ども自らが育とうとする力を信じ、子どもの健やかな成長を願っての保育が行われていた様子も垣間見られる。なによりも、子ども達が幼稚園で楽しんで活動し、過ごしていた様子がうかがえる。

本稿では、昭和20年代の保育の実際について、昭和24年度試案保育計画(その基礎)(一)、月案、『幼稚園の教育計画』（昭和29年2月）を中心に、考察する。

２．昭和24年度試案「保育計画」（その基礎）（一）

表紙（B4版）に縦書き3行に、昭和二十四年度試案保育計画（その基礎）（一）、奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属幼稚園、と印字されている。そして、表紙右下に今西寿子（昭和20年～昭和47年在職）と書かれていることから、当時の幼稚園教諭であった今西寿子のものであったと考えられる。昭和二十四年度試案保育計画（その基礎）（一）（以下、「保育計画」（一））は年間保育計画である。また、「保育計画」（一）とあることから、（二）、（三）もあるのではないかと考えられるが、現存しているのは（一）のみである。

前文は、表１のとおりである。「保育計画を立てるにあたって」の４の幼児教育の五目標[5]は、学校教育法（昭和22年）第23条の幼稚園（目標）のことであると考えられる。前文より、「保育計画」（一）は、教育基本法（昭和22年）、学校教育法に則って、「保育要領―幼児教育の手引きー」（文部省、昭和23年．以下、「保育要領」）を何度も読み、幼児の生活に基づいて今までの保育を見直し、附属校の特性と奈良の地域性を考慮して、正しい保育の方向性を求めて作成されたものであることがうかがえる。

「保育計画」（一）（表２）は、まず月々の保育主題が記載され、上段から順に次の保育内容が記されている。自由遊び・ごっこ遊び、見学観察、言語（童話、幼児の言語及び劇遊び）、音楽・体育（唱歌・鑑賞・リズム・唱歌遊戯・競技）、絵画、製作、集団生活、健康、安全、年中行事、家庭との連絡。

表１．昭和24年度試案「保育計画」（一）前文

新しい保育計画

幼稚園は新しい学校教育法によって学校体系の中に入り、教育の出発点としてはっきりその位置をみとめられるに至った。次いで文部省よりも保育要領が出され、私等は幼児のその生活をみつめ直し、幼児教育の新しい方針に即した保育計画を立てる必要を痛感している。

保育は教育基本法にある教育の理想や、学校教育法にあげられた幼稚園の目的及び目標を心にとめ幼児期の特質にあつたものでなければならない。而もその出発点となるものは幼児の興味や要求であり、その通路は幼児の生活であり、その実際は幼児の発達程度に即したものであって、それに適した生活環境を造り、幼児自身を持っているよき芽生を伸してゆくことにある。

私等は何度も保育要領をよみ、唯それをうのみにするのでなく、良心的に十分闘論し又幼児の生活を見つめて今までの殻から抜け出ようと努力すると同時にあくまでも正しい保育のみちしるべを得ようとした。

保育計画を立てるにあたって

１、 今までの保育五項目全部白紙にかえし、楽しい幼児の生活の上に立って幼児の興味、要求にふさわしいものを主題に取り上げ、それよりも展開する幼児の生活を如何に誘導するか考えようとした。

２、 それが幼児の心身の発達段階に即したものであり、如何にその生長を助けるものであるか考えようとした。ひとりびとり立派に又みんな仲よく。

３、 将来の民主的な社会人へとつながるものとして考えようとした。

４、 幼児教育の五目標に向って円満な発達をなすために、どんな幼児の生活内容を必要とするか考えようとした。

幼児期は身体的、知的、情緒的、社会的にも他の時期と著しくちがった特質をもつものであり、指導者は保育計画を一応立てゝ置いても、実際にあたってはいつでも幼児の状態に即応して変更、展開出来る用意が必要である。

保育内容も幼児の現実の姿から考えてゆかねばならないから、そのために保育計画は弾力性に富みゆう通性に富んだものでなければならない。

先ず幼児の楽しい生活内容として、季節に応じ、地域に即し、幼児の発達程度に応じて月々のめやすを定めて、幼児の社会とつながる生活の指導を考えた。

又幼児教育は家庭との密接な連絡協力によってはじめて達成出来るものであるから、家庭との連絡もその中に入れた。

奈良女子大学奈良女子高等師範学校附属幼稚園として、本校、附属各校とも連絡を密にすることにより一層保育の効果を上げたい。

さらに奈良の地が大阪、京都の大都市に接した小都市であり、特に古代の文化に恵まれつゝも立派な奈良公園を近くにひかえている環境をも十分考え合せたつもりである。

注）縦書きを横書きにした。　　奈良女子大学附属幼稚園所蔵

当時の主事は、小川正通（以下、小川）である。小川は、明治41（1908）年に仙台市に生まれ、昭和7（1932）年に、東北大学文学部哲学科（教育学専攻）を卒業している。その後、奈良女高師教授になり、昭和16（1941）年3月から昭和27（1952）年8月までの戦前の戦争激化から終戦、戦後へ

表２．昭和 24 年度試案「保育計画」（その基礎）（一）

奈良女子大学附属幼稚園所蔵

月	四月	五月
保育主題	園 幼 い し の た	う ば 遊 て 出 に 野
自由遊び ごつご遊び	砂遊び まゝごと 奈良の大佛さん 汽車	花いちもんめ 八百屋さん あぶくたった
見學観察	幼稚園 ○園舎 ○園庭 ○先生 ○友達 本校 春の野遊 ○つみ草 ○櫻見 奈良公園	端午の節句 ○鯉のぼり ○五月人形 種まき ○朝顔 小川遊び及び おたまじやくし飼育 金魚 野菜 つばめ 蚕
言語 童話	春が来た 蝶々の首かざり 蝶々のみつどり おむすびころりん（紙） くじやくと蚕（紙） 花咲爺（紙） 大きな玉 富子さんの風船	花びらの旅 鯉のぼりと雀 金太郎（紙） おべんとう（紙） おたまじやくしのお父さん 目高の坊や つばめの話 桃太郎
言語 幼児の言語及び劇遊び	簡単な日常語を正しくさせる 正しくきく態度を養う	自由発表をさせる
音樂体育 唱歌	汽車 結んで チューリップ ブランコ 母様ごつこ まゝごと	鯉のぼり 金太郎 お玉杓子 金魚 楽しい幼稚園 おかえりの歌 子供の日
音樂体育 鑑賞	靴が鳴る 小鳥屋の店	蛙の行列 郭公
音樂体育 リズム	音に感じる 歩く（模倣動作） 出して引込めて	音の高低 兎と亀 高足 つまだて 幼児体操
音樂体育 唱歌遊戯	汽車 結んで チューリップ 母さまごつこ まゝごと	鯉のぼり 金太郎 お玉じやくし 金魚 楽しい幼稚園 子供の日
音樂体育 競技		宿がえ 巾とび
絵画	自由画	鯉のぼり 金魚及び おたまじやくし 自由画 川遊び 印象画
製作	花つなぎ 蝶々（折り紙）	鯉のぼり おたまじやくし（貼り紙） 金魚（折り紙） いとこ
集団生活	自他の区別 あいさつ 仲良くする 歸途 ○仲良く ○道草をしない	片づけ ○遊具の後始末 ○机の中の整理 整頓 ○静かに ○早く 當番 ○責任をもたせる
健康	清潔 ○手を洗う ○鼻をかむ ○爪を切る ○便所の使用を正しく ○水道の栓をする 身体検査 園醫の検診 整容 ○ハンカチ、鼻紙を忘れぬ ○服装は正しく整える	辦當 ○食前後の室の清潔整頓 ○食前の手洗うがい ○食前食後のあいさつ ○よくかんで ○すききらいをしない ○こぼさないで ○食後の片付け ○食後は静かに（休息） ツ反應検査
安全	廊下を走らぬ 窓に登らぬ 右側通行 道草をしない	石ころやがらすを拾う 非常訓練
年中行事	入園式 入園寫眞撮影 天皇誕生日 誕生曾（毎月）	憲法記念日 小鳥の日 子供の日（端午の節句） 母の日 遠足
家庭との連絡	保護者曾（入園前） 家庭調査 保護者曾（育友曾及び曾内母の曾結成） 誕生会及び誕生児の父母招待	母親講座 特別クラス第一期（母の曾主催）

表３．月案（三年保育）（昭和 24 年度以後～昭和 26 年度）

四月	題主	楽しい幼稚園	生活の展開	○うれしい入園 ・入園式 ・園内を見て廻る ・本校え行く ○たのしくあそぶ ・室内あそび ・外あそび		
	標目	○入園の喜びと幼稚園生活の楽しさを味わゝせる ○先生、お友達と親しみ、仲良くあそばせる ○幼稚園生活に馴れさせる	補導の着眼点	子供達が喜んで自然にあそびに入れるような楽しい環境、雰囲気をつくって、毎日楽しみ乍ら、進んで登園する様導く 入園児に安定感を与え付添と早く離れさせる 特に過労にならぬよう、健康状態に留意する		
			生活内容 健保	ハンカチ 鼻紙を持つ 鼻をかむ 爪を切る 手洗 身体検査（毎月） 検便（隔月） サントニン服用（毎月）		
			生活内容 生活団集	園内を覚える 保育室 手洗場 便所 遊具の置場所等 机・駄菓子帽子等の位置を覚える 持物の始末をする 自他の持物の区別をつける 先生の名前組名を覚える 便所の使用を正しくする 返事をはつきりする 挨拶をする 右側通行 紙屑はちり箱		
			生活内容 自由遊び	ブランコ スベリ台 積木 砂あそび 奈良の大仏さん 絵本を見る		
			生活内容 見学観察	幼稚園・園者・園庭・飼育・動物・先生・お友達 本校 春の草花		
			表現 言語 くき	富士さんの風船 もゝちゃんのリボン おむすびころりん（紙） くちゃくとすずめ（紙） みんないい子（紙）		
			表現 言語 表発	はい おはようございます ありがとう いってまいります さようなら ただいま 先生に要求を伝える		
			表現 音楽リズム くき	靴がなる（レコード） 急行列車（レコード） おすんぼ（先生） おたんじょう日		
			表現 音楽リズム うたう	結んで 汽車 母様ごつこ チューリップ		
			表現 音楽リズム くひ	音楽に合せて手を打つ		
			表現 音楽リズム のき動ムズリ	音に感じる ・音がしたら動く ・音が止まれば止まる ・歩く ・とぶ 模倣動作（先生の即興 手を主体とする）		
			表現 音楽リズム の歌現表	結んで 汽車 母様ごつこ チューリップ		
			表現 作製画絵	自由画 手提（山に折る） 蝶々（山に折る） くひかざり（住）		
			事行中年	入園式 誕生日（毎月） 天皇誕生日		
			携連のと庭家	保護者会 誕生児の母招待（毎月） 家庭訪問 育父会結成 クラス懇談会（毎月）		

奈良女子大学附属幼稚園所蔵

とまさに激動の過渡期に、附属幼稚園の主事を務めた。

小川は、「「保育要領」批判」において、「…「保育要領」は、保育界にとって、少なくとも三重の、而も画期的な意義を有していると考える。その一は、…　新保育の具体的指針・内容・方法等の基準がここに示されたことである。その二は、…　わが国の幼稚園創設以来、殆ど前例のない保育の基準を全幼稚園教員に提供したことであり、その三は、更に幼稚園教員のみを対象とせず、保育所保母にも、更に母親にも役立つよう本書を編集したことである」[6] と評価している。さらに、「幼児の発達特質、生活環境、健康、自立の習慣と責任感を重視したこと、幼児の一日の生活の輪郭を示すと共に幼児の保育内容を定めたこと、保育施設と家庭、小学校及び社会との関係を論じたこと等…」[7] についても認めている。しかし、自由主義保育・個性主義保育への偏りを指摘して一律保育・設定保育も必要といい、集団生活の尊重の必要性を主張している。また、「従来の学科目的色彩の強かった保育項目を否定して、楽しい幼児の経験という副題をもった幼児の保育

内容を定めたこと…」[8]については認めながらも、楽しい幼児の経験12内容（1.見学、2.リズム、3.休息、4.自由遊び、5.音楽、6.お話、7.絵画、8.製作、9.自然観察、10.ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、11.健康教育、12.年中行事）の配列法と字句の再検討について言及している。

このことから、小川は、「保育計画」（一）において、まず月々の保育主題を決めて保育の方向性を明らかにし、保育内容に集団経験を加えて保育内容を「自由遊び・ごっこ遊び、見学観察、言語、音楽・体育、絵画、製作、集団生活、健康、安全、年中行事、家庭との連絡」としたと考えられる。そして、言語の経験活動を童話・幼児の言語及び劇遊びとし、音楽・体育の経験活動を唱歌・鑑賞・リズム・唱歌遊戯・競技として、教諭とともに検討しながら、幼児の生活に基づいて今までの保育を見直して組織化したと考えられる。

３．月案

綴じられていない月案の束が現存している。その一番上の月案四月に、井関美子（昭和24年～昭和33年在職）と書かれている。その束の内訳は、次のとおりである。一年保育（四月～七月、九月～翌年三月）、二年保育年長（四月～六月、九月～翌年三月）、二年保育年少（四月～七月、九月）、三年保育（四月、五月、七月）。これら月案には時期（年）の記載はないが、月案に書かれた井関美子は昭和24年度から昭和33年度まで在職していること、昭和27年度から一年保育が廃止されたこと、筆者が大橋和子（昭和24年度～昭和59年度在職）より「富永先生の時に、子どもの体重が減り、おやつ（牛乳）、昼寝を始めた。また幼稚園キャンプを実施した」と聞いていることから、月案におやつ（牛乳）・昼寝・幼稚園キャンプの記載がないことを考え合わせると、これらの月案は昭和24（1949）年度から昭和26（1951）年度に、園内研修等で各担当者から出された検討中のものと思われる。三年保育については、小川が戦争の非常時の最中において、「低年保育（３歳児保育）が必要である」と主張したことから、昭和20年5月より３歳児保育を開始している。

月案（表３）は、まず主題と目標が記載され、生活の展開・補導の着眼点、生活内容、家庭との連絡、評価の欄（４・５歳児のみ）が設けられている。月案では、主題と目標において月の保育の方向性をより明確にし、子どもの発達に即して生活の展開を大まかに定めて補導の着眼点を記載し、保育内容を生活内容に改めて、保育計画（一）よりも組織化し、秩序立てたと思われる。４・５歳児の生活内容については、さらに次のように分けて記されている。保健、集団生活、見学観察、表現言語（きく・発表）、音楽リズム（きく・うたう・ひく・動きのリズム・あそび、歌の表現）、絵画製作、年中行事。３歳児の生活内容については、「保健、集団生活、自由遊び、見学観察、表現（言語（きく・発表）、音楽リズム（きく・うたう・ひく・動きのリズム）、絵画製作、年中行事」となっている。つまり、３歳児では、自由遊びが、生活内容の保健、集団生活、見学観察、表現、年中行事と同等に重視されて位置付けられ、４・５歳児では、表現の中の音楽リズムの中にあそびとして位置付けられている。このように、自由遊びを生活内容に位置付けたことから、戦後は自由遊びが尊重され、とりわけ３歳児では重視されていたと思われる。このことから、子どもの主体性を尊重していた様子もうかがわれる。

同時に「アメリカの幼稚園における日課の諸例　附　日案・週案　」（小川正通訳）が残されている。ここでは、アメリカの３教育委員会・３幼稚園・種々の幼稚園の一日の時程と幼児の活動が紹介され、さらに日案例や週案例が紹介されている。このことから、小川を中心に「アメリカの幼稚園の日課諸例、日案・週案」を参考にして「保育計画」を見直し、月案において、生活内容の再検討をして改善したと思われる。

「保育計画」（一）と各月案を見比べてみると、「保育計画」（一）は月案三年保育と内容が重複する箇所が多いことから、三年保育の年間保育計画と考えられる。

さらに、小川は、『60年の歩み』（奈良女大附幼、昭和46年）の挨拶において、「戦争中の国民保育から、戦後の自由保育、民主保育への転換も大変でした。来校したアメリカ教育使節団に保育の現場を見てもらったこと、３年保育の開始、日曜日の父親参観の実施、ＰＴＡを組織化しバザーだけでなく、社会教育的活動を試みたことなど。また全国保育連合会、日本保育学会の会場を引き受けたこと、全国の附幼主事会を結成したことなども、つい先頃のように思い出されます。」[9]と述べていることから、父親参観（日曜日）やＰＴＡの組織化など園内運営においても積極的に家庭連携に取り組み、全国附幼主事会結成、全国保育連合会や保育学会にも積極的に参加して全国組織の中で幼児教育の質の向上を願っていた様子がうかがえる。

４．『幼稚園の教育計画』[10]（昭和29年２月）

昭和27（1952）年度から園長、主幹制がしかれ、園長は文学部教授がこの園長の任に当たることになり、園長事務取扱は小泉卓蔵（昭和27年9月～29年3月）、主幹は発達心理学を専門とする富永正（昭和27年9月～29年3月）が就任した。富永正（以下、富永）は、『幼稚園の教育計画』のまえがきにおいて、「学校としての幼稚園の機能は社会的に望ましい学習が起こるように幼児の経験を秩序づけることである…幼児の適切な行動を確保するために、その学習経験を選択し組織化することは、教育機関としての幼稚園の重要な仕事でなければならない…幼稚園教育におい

てもっと単元活動について研究され、いろいろな幼児の経験がさらに効果的に展開されるように計画され指導されなければならない。」[11] と述べている。『幼稚園の教育計画』の内容は次のとおりである。一.幼稚園の計画（富永）、二.教育課程（1.年長組・単元表、2.年少組・単元表、3.三年保育組・単元表）、三.単元の展開の実例（年長組・年少組）、四.健康教育の計画、五.生活指導、六.リズム合奏の指導、七.幼児の劇遊び、八.三年保育児の観察、九.幼稚園のキャンプの試み、一〇.母の会の人形芝居。二の教育課程の冒頭文において、「これは従来使用していたカリキュラムを改訂したものであって、全面的に新しい観点から反省検討を加えたものである」[12] と記されている。これらのことから、昭和24年度試案「保育計画」、その後の月案は、幼児の経験を「生活という学習」の観点から生活の展開・生活内容を組織化しようとしていたのに対して、『幼稚園の教育計画』は、幼児の経験を「教育という学習」の観点から、先のカリキュラム(「保育計画」・月案）を反省検討して、単元を中心にして秩序づけ、組織化して、改訂したものであると考えられる。単元を中心にしたことについては、当時奈良女子高等師範学校附属小学校（以下、奈良女高師附小）で、すでに実践されていたことから、影響を受けていたと思われる。

奈良女高師附小の主事は、大正8（1919）年3月から昭和15（1926）年12月まで木下竹次（合科学習提唱）、次いで武田一郎（以下、武田）（昭和15年12月～昭和22年7月）である。武田は、原書でデューイ（Dewey, J. 1859～1952）の教育哲学を同志の者に1年半の間毎週指導した[13]。その後、昭和22（1947）年12月に、重松鷹泰（以下、重松）が、文部省教科書局（小学校社会科担当）から、奈良女高師附小の主事に就任し、昭和22（1947）年12月から昭和27（1952）年3月まで、主事を務めている。武田の主事の時代に、デューイの思想を受け継いだ教員らと共に、重松を中心に「しごと」「けいこ」「なかよし」という教育構造（教育形態）をもつ教育計画「奈良プラン」が作成され、昭和23（1948）年度9月より実施されている。「しごと」は「子どもたち自身がめあてを持って、めあての実現に向って、共同して全身全霊を打ち込んでいく生活の部面であって、子どもたちにめあて達成のため、自己の全能力を傾倒する機会を与えるとともに、子どもたちに、外なる社会及び自然にはたらきかけ、自然および社会に対して目が開き、これを合理的に処理していく態度をつけていきます…すなわち、社会科および理科の要求しているものの大部分を単元という形で学習する機会を提供するものといえます。もちろん、国語、算数、工作、図画、家庭科などの要求に対しても…」[14] として、単元をしごとに位置付けている。「けいこ」は「しごとの中で自然に、すなわち必然的に発展させられるもの以外の、各種能力―その中には直接しごとに必要なものもあり、ただ発展の契機を与えられるだけのものもあり、その時機に於て発展させることが最も能率的でありながら、しごとの中では、発展させる機会も、契機も与えられないものもあるーを、その時その時に特定し、一定の基準に照合して、修練させ発展させる生活の部面」[15] とし、「各教科に分立するものではなく、もっと総合的な機動性をもったものであり、特定の能力と修練をねらって傾倒的に実施されるもの」[16] として、具体的には体操や音楽をあげている。「なかよし」は、「子どもたちをして、自分たちの生活の場を、自分たちの手で形成させる部面」[17] とし、具体的には課外活動としている。

『幼稚園の教育計画』の単元については、富永が、デューイ説を引用して単元の展開を説明していることからも、デューイの思想に傾倒していた様子がうかがえる。『幼稚園の教育計画』において、単元と同様に健康教育、生活指導、リズム合奏の指導、幼児の劇遊び、幼稚園のキャンプの試み、母の会の人形芝居を取り上げていることから、重要視していた様子がうかがわれる。リズム合奏の指導、幼児の劇遊びは、奈良女高師附小の「けいこ」的取扱いがうかがわれ、幼稚園のキャンプは「なかよし」を考慮して開始されたと思われる。当時の奈良女大附幼の一日の流れをみると、「登園自由遊びー整理朝会―単元活動―戸外遊びー間食休息―集団経験―食事休息―戸外遊びー散園」である。『幼稚園の教育計画』の内容に集団経験がなく、一日の流れの中に位置づけたのは、単元活動の中にはグループ・個人的あるいは集団的な活動があるとしながらも、集団経験として取り上げた方がより効果のあるけいこ的活動もあることを配慮してのことと考えられる。このことからも、単元活動だけでなく、奈良女高師附小の教育形態に影響を受けていた様子がうかがえる。

『幼稚園の教育計画』年長組（５歳児）単元表の単元名は、「4.9～4.30たのしい幼稚園にしましょう、5.2～5.9子供の日を祝いましょう、5.11～5.27動物園ごっこをしましょう、5.6～5.28野に出て元気に遊びましょう、6.8～6.12時計をつくりましょう…」である。月案（Ｓ24年度－26年度）の年長組（５歳児）生活の展開は、「4月：うれしい幼稚園、仲よしお友達、5月：子供の日、お弁当はじめ、野あそび、6月：時計、梅雨…」である。このことから、『幼稚園の教育計画』は、小川の主事時代に生活の展開として実践されていた保育を、教育の視点から見直して単元として展開されたと考えられる。IFEL（Institute For Education Leadership）[18] において、「講師のガードルード・エム・ルイス（Gertrude M.Lewis　以下、ルイス）が、日本の幼稚園と小学校が分かれていて教育の内容など連絡がとられていない。一貫した教育を、と主張されたことにより、幼稚園から小学校低学年の教育を「幼年教育（３歳から８歳まで）とした」[19] ことから、日本中に幼小連携の必要性の機運は高まっていたと思われる。奈良県代表として奈良女大附幼の大橋和子がIFELに参加（昭和25年9月～12月）し

ていることから、奈良女大附幼の教育計画は幼小連携のことを考えて、奈良女大附小の教育形態にならって、『幼稚園の教育計画』を作成したと考えられる。

福元真由美は、「解説１戦後のカリキュラムの出発において」に、「奈良大附幼のカリキュラム開発は、保育要領にしばられず自由に行われている。『幼稚園の教育計画』の六年前に保育要領が出されたが、本書に保育要領への言及は見当たらない。…本園の保育内容も保育要領に捉われない編成で、独自のカリキュラムを開発しようという志向がみられる」[20] と記述している。しかし、昭和24年度「保育計画」は、「保育要領」を参考にして、生活に基づいて、戦前の教科的色彩の強い５項目を中心とした保育を見直し、附属校の特性と奈良の地域性を考慮して、正しい保育の方向性を求めて作成されたものであること、さらに、「保育計画」（一）と月案を教育の視点から見直して『幼稚園の教育計画』が作成されていることを考えると、戦後の奈良女大附幼のカリキュラムは、「保育要領」に捉われない編成で、開発されたカリキュラムであるとは言いがたい。

５．おわりに

小川は、「保育要領「六.の幼児の保育内容―楽しい幼児の経験―」（1.見学、2.リズム、3.休息、4.自由遊び、5.音楽、6.お話、7.絵画、8.製作、9.自然観察、10ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、11.健康教育、12.年中行事）を参考にして、保育計画（一）において、保育内容を「保育主題、自由遊びごっこ遊び、見学観察、言語（童話、幼児の言語及び劇遊び）、音楽・体育（唱歌・鑑賞・リズム・唱歌遊戯・競技）、絵画、製作、集団生活、健康、安全、年中行事、家庭との連絡」とした。さらに検討をして、月案では、まず主題と目標が記載され、生活の展開、補導の着眼点、生活内容、家庭との連絡、評価の欄（４・５歳児のみ）が設けられている。４・５歳児の生活内容については、さらに次のように記されている。保健、集団生活、見学観察、表現「言語（きく・発表）、音楽リズム（きく・うたう・ひく・動きのリズム・あそび、歌の表現）、絵画製作」、年中行事。３歳児の生活内容については、自由遊びが、生活内容の保健、集団生活、見学観察、表現、年中行事と同等に重視されて位置づけられている。このことから、「保育要領」を参考にしながら、幼児の経験内容を羅列的に並べるのではなく、子どもの発達の視点、及び子どもの生活内容の枠組みを考えながら組織化しようとしている様子がうかがわれる。

以上のことから、昭和20年代の奈良女大附幼の保育の実際は、戦前の教科的色彩の強い５項目を中心とした保育から、昭和24（1949）年に、幼児の生活経験を中心とした保育へパラダイムチェンジして、実践されていたと考えられる。さらに、昭和29（1954）年には、幼児の経験を、生活から教育に焦点をあわせて見直し、先のカリキュラム(「保育計画」・月案）を反省検討して、単元を中心にして秩序づけ、組織化して、改訂されたと考えられる。単元を中心にしたことについては、当時、奈良女高師附小で実践されていた教育形態（しごと・けいこ・なかよし）を見据えて幼小連携を考えてのことと思われる。

昭和31（1956）年に、文部省は「保育要領」を改訂して、「幼稚園教育要領」を編集した。その後、奈良女大附幼の保育の実際はどのように変化し、発展していくのかについては、今後の課題にしたい。

本研究は、日本保育学会第72回大会で発表したものを加筆修正したものである。資料を提供していただきました奈良女子大学附属幼稚園の先生方に謝意を表します。

文献

１） 拙著：日本における保育実践歴史研究―大正デモクラシー期を中心にー，御茶の水書房，19 - 39，2010。
２）随意遊戯は、東京女子高等師範学校附属幼稚園で使用されていた用語である。明治33年の同保育要項第四保育事項に「一遊嬉…遊嬉ハ随意遊嬉及共同遊嬉ノ二ニ区別ス。…」とある。
３）拙著：前掲書，40 - 93.
４）拙著：前掲書，133 - 152.
５）五目標は次のとおりである。一　健康、安全で幸福な生活のために必要な基本的な習慣を養い、身体書機能の調和的発達を図ること。二　集団生活を通じて、喜んでこれに参加する態度を養うとともに家族や身近な人への信頼感を深め、自主、自律及び協同の精神並びに規範意識の芽生えを養うこと。三　身近な社会生活、生命及び自然に対する興味を養い、それらに対する正しい理解と態度及び思考力の芽生えを養うこと。四　日常の会話や、絵本、童話等に親しむことを通じて、言葉の使い方を正しく導くとともに、相手の話を理解しようとする態度を養うこと。五　音楽、身体による表現、造形等に親しむことを通じて、豊かな感性と表現力の芽生えを養うこと。
６）小川正通：「保育要領」批判，日本幼稚園協会，復刻幼児の教育第48巻，フレーベル館，32，昭和56.
７）前掲書，32.
８）前掲書，35.
９）奈良女子大学文学部附属幼稚園，60年の歩み，4，昭和46.
10）奈良女子大学文学部附属幼稚園，幼稚園の教育計画，ひかりのくに昭和出版（株），昭和29年2月，（奈良女大附属図書館所蔵）.
11）前掲書，2 - 3.
12）前掲書，30.

13) 奈良女子高等師範学校附属小学校，わが校百年の教育，61，平成24年.
14）前掲書，69 - 71.
15）前掲書，71.
16）同上.
17）同上.
18) IFEL（Institute For Education Leadership）とは、昭和23年9月から昭和27年3月まで、8期にわたって、文部省とCIE（Civil InformationandEducation Section:民間情報教育部）の共催で、全国から教育関係の専門家を集めて開催された教育指導者講習会のこと。幼児教育については、1950年9月18日～12月8日（第5回）、1951年1月8日～3月31日（第6回）、お茶の水女子大学で開催された。奈良県代表として奈良女大附幼の大橋和子が参加している。
19）拙著：IFELの実際―大橋和子によるルイスの講義ノートを中心にー，福山市立大学開学論集　児童教育学を創る，児島書店，142，2011.
20）福元真由美：解説１戦後カリキュラムの出発，太田素子監修，戦後幼児教育・保育実践記録集　第20巻，日本図書センター，25 - 26，2015.